

原毅彦教授、中達啓示教授、高橋伸彰教授、 龍澤邦彦教授のご定年にあたって

原毅彦教授、中達啓示教授、高橋伸彰教授、龍澤邦彦教授の4人の先生方が、2018年度末でご定年を迎えられます。『立命館国際研究』の月号は、4人の先生方のご定年を記念して刊行されるものであります。

朝鮮戦争の休戦協定が調印された後の時期にお生まれになった4人の先生方は、1997年から2000年にかけて、立命館大学国際関係学部に着任されました。4人の先生方は国際関係学部が西園寺記念館を学舎としていた「古き良き時代」の最後の時期をご存知でいらっしゃると思います。先生方が国際関係学部勤務された1997年からいままでの時期は、日本、東アジア、世界の激変期であり、立命館大学もまた大きく変化しました。この時期に、4人の先生方は、それぞれのスタイルで、国際関係学部・研究科の発展に多大なご貢献をされました。わたしたち国際関係学部の教職員一同、4人の先生方に心から御礼を申し上げます。

原毅彦先生は1997年に信州大学から国際関係学部に来られました。原先生のご専門は文化人類学です。原先生が国際関係学部に来られるにあたって、国際関係学部における文化・社会領域の中心的な研究者であった西川長夫先生、文学部の文化人類学者、渡辺公三先生とのご縁がありました。原先生は、西川先生、渡辺先生とともに、国際言語文化研究所の旺盛な研究活動に参加されました。西川長夫・原毅彦編『ラテンアメリカからの問いかけ——ラス・カサス、植民地支配からグローバリゼーションまで』（人文書院、2000年）、西成彦・原毅彦編『複数の沖縄——ディアスポラから希望へ』（人文書院、2003年）はその成果の一部です。国際関係学部においては、「文化人類学」「民族文化誌」「ラテンアメリカ研究」等の科目を担当されました。また、渡辺公三先生が中心になってつくられた大学院先端総合学術研究科でも科目を担当されました。遊び心あふれる原先生のスタイルは間違いなく国際関係学部のひとつの伝統を体現していると思います。西洋近代を批判的にとらえ返す視点、ポストコロニアリズムの視点等、西川長夫先生以来の知的系譜をいま再活性化させることは、われわれの課題であります。

中達啓示先生は1998年9月に広島大学から国際関係学部に来られました。ご専門は国際政治史で、シカゴ大学において入江昭先生のもとで博士号（歴史学）を取得されました。特に米国の東アジア政策をご専門とされていますが、米ソ冷戦終結後は国際政治経済学の研究方法を

とられています。中達先生は、過去 20 年間の立命館大学のグローバル教育を牽引されたキーパーソンのおひとりでありました。「国際インスティテュート」という学部横断的な国際教育プログラムの教学委員長を合計 6 年間つとめられ、衣笠キャンパスの各学部の国際教育の水準を目覚ましく向上させました。同時に、中達先生は、あくまでも日本のアイデンティティを中心に置いたうえでグローバルな思考と教育をされており、internationalist であると同時に patriot であります。2014-2015 年度は、大学院国際関係研究科長として、国際関係研究科を時代に適合させる改革に取り組みました。また、アメリカン大学、高麗大学等のアジア太平洋の諸大学をつなぐ学術シンポジウム、あるいは日本の 8 大学で組織する日米研究インスティテュート (U.S.-Japan Research Institute) 等、大学間研究連携にも尽力されました。

高橋伸彰先生は、龍昇吉先生の後任として、日本開発銀行 (現、日本政策投資銀行) から 1999 年に国際関係学部に来られました。高橋先生のご専門は日本経済論で、日本経済が直面する問題の理論的・実証的な分析とそれに対する政策の分析・評価・提言をされてきました。朝日新聞の書評委員、論壇時評委員会委員としての高橋先生の文章を、朝日新聞紙上で拝読したことも記憶に新しいところであります。国際関係学部では、「日本経済論」「現代経済事情」等の科目を担当されました。講義を通じて、日本経済の現状を経済学的に洞察したうえで、社会正義の観点から規範的に考えることを強調されました。高橋先生は、学部・研究科の運営についても、多大なご貢献をされました。研究科主事 (現、大学院担当副学部長)、教学担当副学部長をつとめられた後、2007-2008 年度は、学部長・研究科長をつとめられました。立命館大学のガバナンスが困難な時期にご苦勞をされたと思います。高橋先生が学部執行部のとき、国際関係学部の教員体制の強化——すぐれた若手研究者の任用——に尽力されたことのご功績は大きいと思います。2011-2014 年度は、国際地域研究所の所長をつとめられました。高橋先生は、教授会・研究科委員会で、一貫して、ご自分のお考え・信念をストレートに表現され、それがわれわれの考えを鍛え直す鍛錬の場になったと感じています。

龍澤邦彦先生は 2000 年に中央学院大学から国際関係学部に来られました。パリ第一・パンテオン・ソルボンヌ大学、国立行政学院等で学ばれ、法律学国家博士号を取得されています。国連開発計画での実務経験もお持ちで、国際社会の理論と実務の両面にわたる豊かなご見識・ご経験によって、国際関係学部・研究科の研究教育に深みを与えてくださいました。龍澤先生の主たるご専門は、国際法、宇宙法、国際バイオエシックス法、先端科学技術の政策と法です。宇宙法の権威として、日本政府の懇談会の委員をつとめられたり、ヨーロッパの大学で講義をされたりしてきました。国際関係学部では、「国際機構論」「法学」「国際関係学」等の科目を担当され、学生の知的好奇心を喚起されました。龍澤先生はまた、大学院の博士前期課程、博

士後期課程で多くの次世代の研究者を育成されました。龍澤先生の知的関心・研究対象は人類史・人類社会の全体に及ぶような広範なもので、自由自在な知的探求を楽しまれています。龍澤先生は普遍人であると思います。

以上、4人の先生方のお仕事、立命館大学へのご貢献のご紹介として、まことに不十分なもので恐縮であります。わたしたちはまだまだ4人の先生方から学び足りないことを痛感しております。2019年4月から、特別任用教授として、あるいはより自由な立場から、引き続きわたしたちへのご指導ご鞭撻をたまわりますよう、お願い申し上げます。最後に、あらためて4人の先生方への心からの感謝を申し上げますとともに、先生方のご研究のさらなる発展をお祈り申し上げます。

2019年3月

立命館大学国際関係学部長 君島 東彦

